

イラストで見る 古代オリエント



はじめに

古代アナトリア、古代エジプト、古代メソポタミア（現在のイラクやシリア）、古代ペルシア（現在のイラン）にかけての現在の中東地域を含む西アジア一帯を**オリент地方**といいます。キリスト教では様々な物語の中心地で、聖書や神話の舞台としてよく登場します。また、オリентは**人類文明発祥の地**ともいわれ、これまでに数多くの遺跡から粘土板などが発見されています。そこに使われていた文字（人類最古の文字）は“**楔形文字**”と呼ばれ、今から5000年も前の事が記されています。古代のオリентに触れるという事は、人類最古の文明に触れる事でもあります。

◆
本冊子は、信徒の友（日本キリスト教団出版局）にて連載中の「目で見える聖書物語／目で見える聖書の世界（月本昭男 監修）*」でイラストを担当している私が、再編集した冊子です。

私はキリスト教について特別な知識を持っているわけでも、クリスチャンでもありません。古代オリентに対しての知識もなく、学生の頃から歴史の授業は苦手でした。しかし、毎月イラストを描く際に資料をお借りし、また調べる事で昔の人たちの文化や生活を少し知る事ができました。今から何千年も前の人々が、どんな住居に住み、どんなものを食べ、どんな文字を使い、どんな神様を信じ、どんな生活をしていたのか。そんな事を考えながらイラストを描いていると、学生の頃に抱いていた歴史に対する苦手意識も、だいぶ払拭されてきた気がします。本冊子では、歴史に興味を持ち始めた歴史初心者の私が、古代オリентの一端についてイラストを中心に紹介します。

また本冊子では、古代の雰囲気を出す為に、筆ペンを主体として手描きのタッチを活かしたイラストを心掛けています。内容によってパソコンで加工する事もありますが、その場合でも、手描きのタッチが残るよう意識しました。

…と、色々書きましたが、構えずに「なんとなく眺めてみよう」程度のゆる～い気持ちで「ふ～ん、こんな時代もあったのか～」くらいにページをめくっていただければ幸いです。

大友淳史

*「目で見える聖書物語」は、2008年度から「目で見える聖書の世界」にタイトルが変更されました。



石で作られた水瓶

石は汚れを通さず、土器や金属は通しやすいとされていたようで、石で作られた水瓶は清めのために用いていたものと思われます。これまでに発見された最大の石瓶は、約80ℓ入りで、加工方法はほとんどわかっていないそうです。

『信徒の友』2008年10月号掲載
使用画材：筆ペン、Photoshop



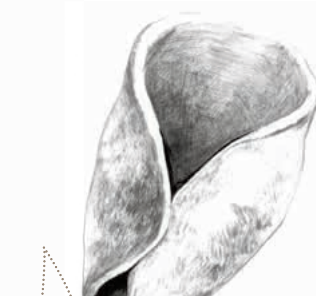
前3000～2000年
前期青銅器時代
簡素な素焼きの皿



前2000～1200年
中期青銅器時代から後期青銅器時代
四隅を折り曲げ、麻の芯を置き、火を灯したようです。



前1200～4世紀
鉄器時代
皿の縁が平らになり、持ちやすくなっています。



前4世紀～1世紀
ヘレニズム時代
ギリシア式のともし火皿といわれています。



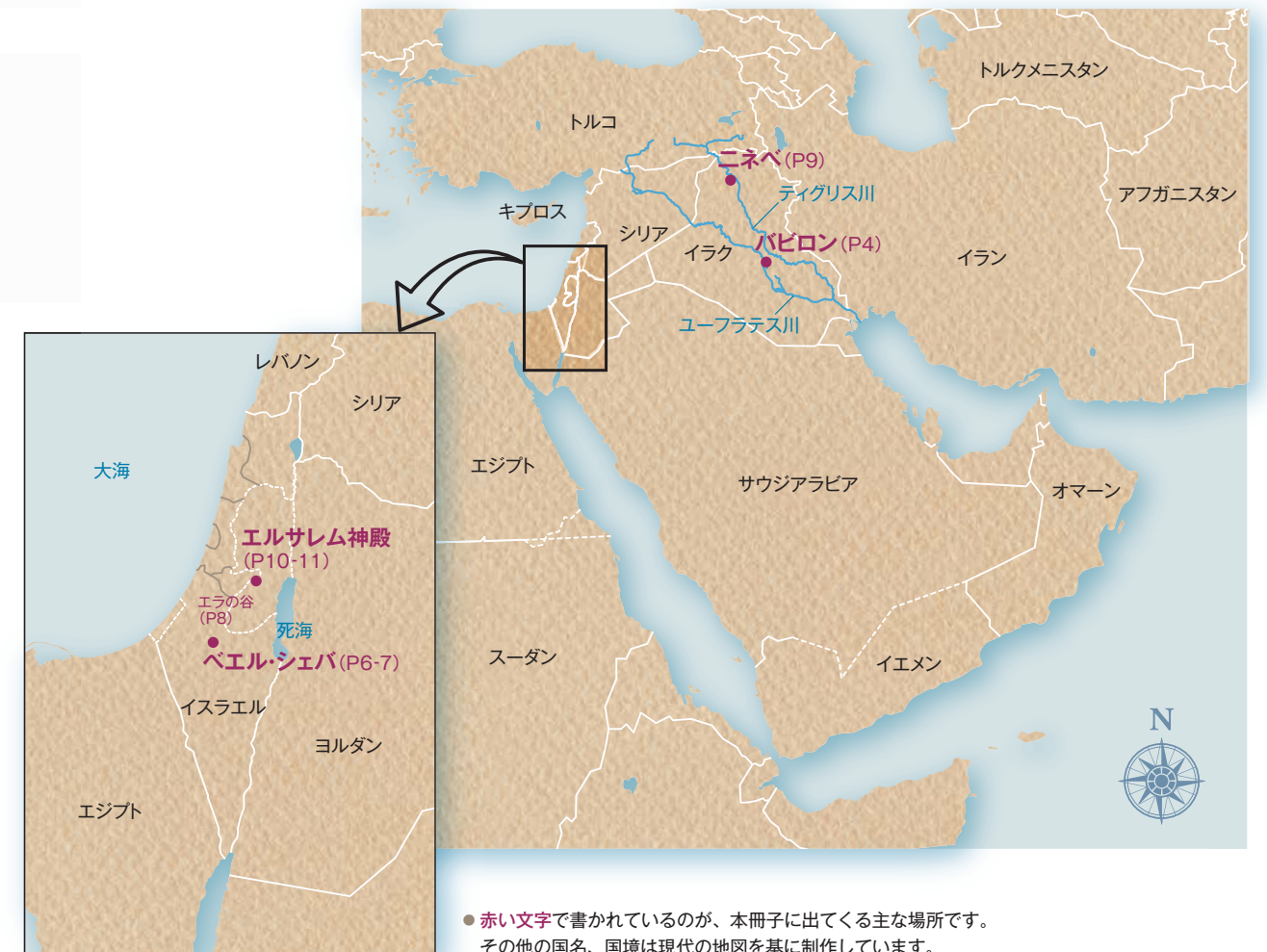
前1世紀以降
ローマ時代
蓋と底で、二つにパーツに分かれています。模様も入り、凝った作りになっています。

ともし火

一つの同じものを時代順に並べてみると文明の変化が見て取ることができます。紀元前4世紀頃になると、政治的にも文化的にもギリシャの影響が及んできているようです。

『信徒の友』2008年9月号掲載
使用画材：筆ペン、Photoshop

本冊子に登場するオリент地方の主な場所



● 赤い文字で書かれているのが、本冊子に出てくる主な場所です。その他の国名、国境は現代の地図を基に制作しています。

B.C. 3000年頃

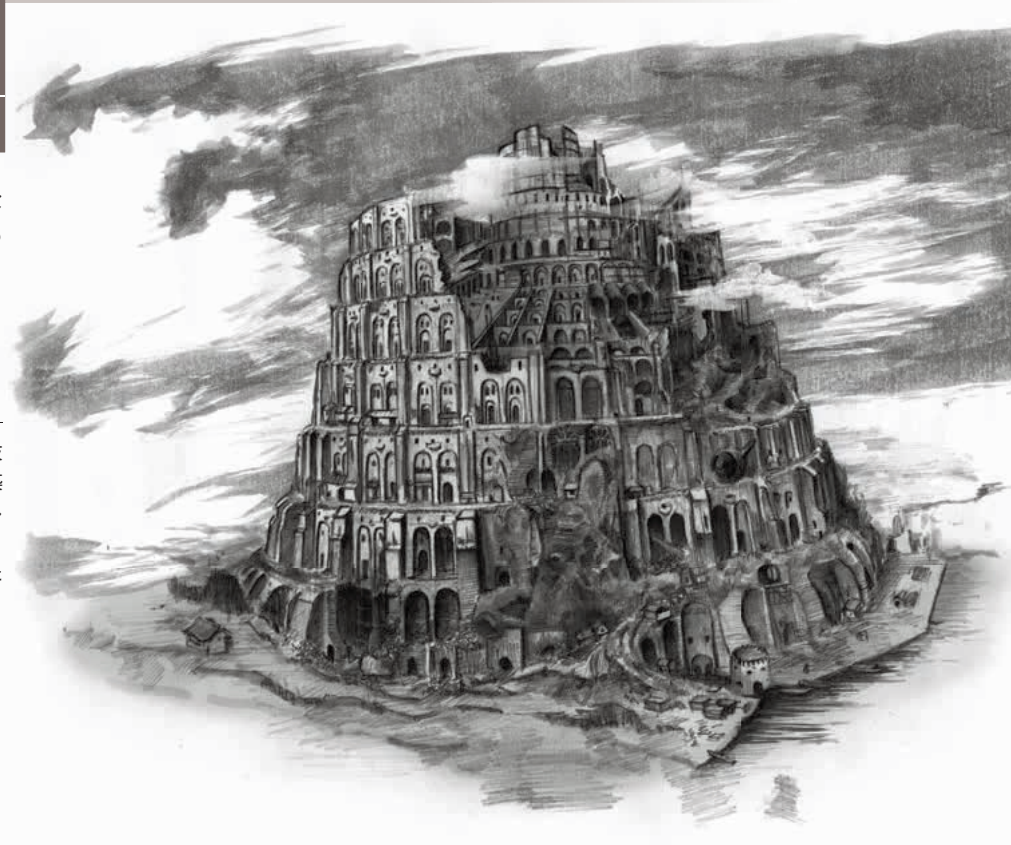
バベルの塔

映画や聖書などに出てくことで有名なバベルの塔。果たしてそれは実在したものなのでしょうか。

バベルの塔

聖書では、人間が自分たちの技術文明によって神なき都市を築き上げるために建てようとした塔として有名で、ジググラト（イラスト：下）が伝説化されたものと考えられています。

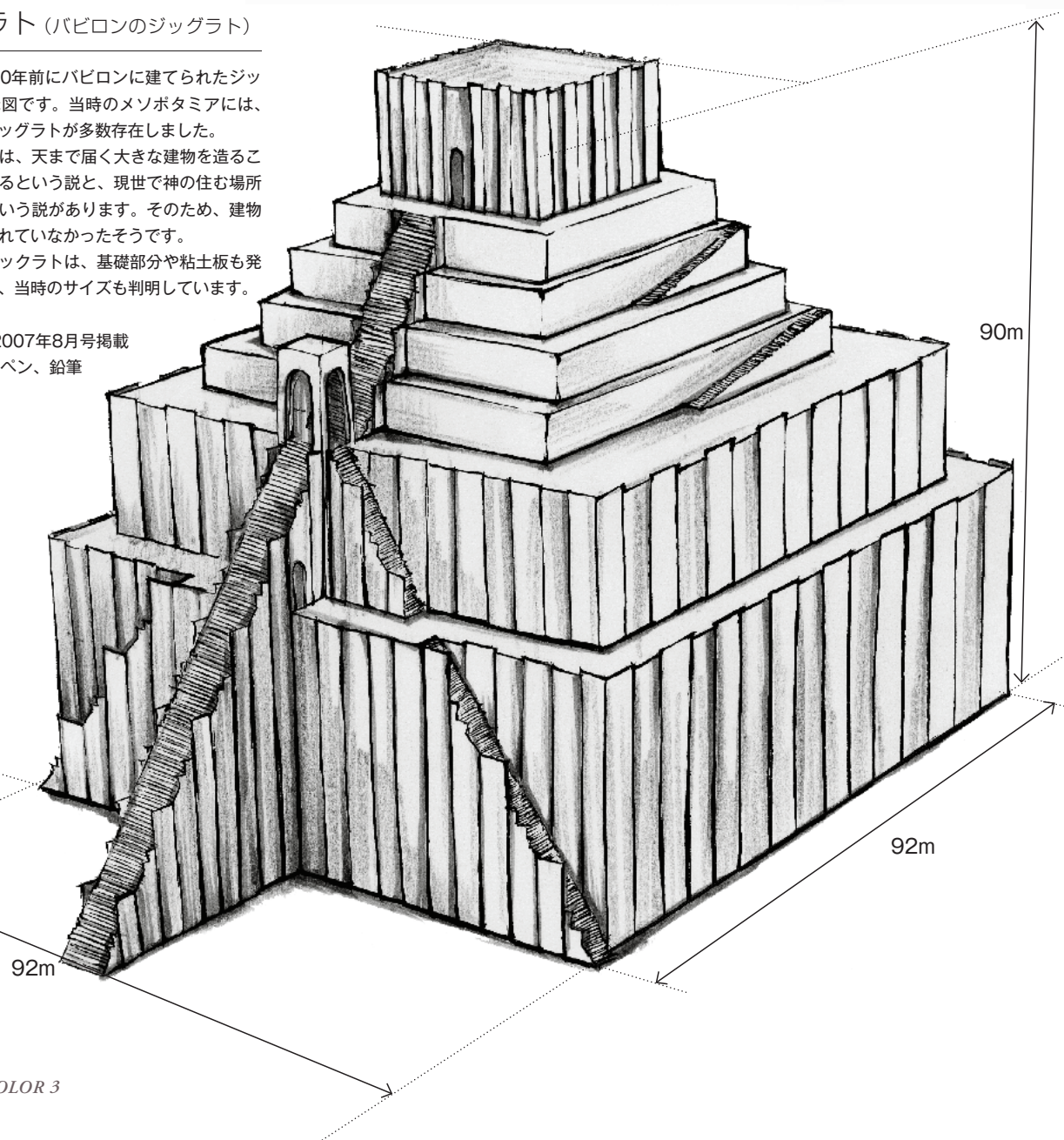
2010年、描き下ろし
使用画材：筆ペン、鉛筆、
参考：ピーテル・ブリューゲル



ジググラト（バビロンのジググラト）

今から約5000年前にバビロンに建てられたジググラトの復元図です。当時のメソポタミアには、こういったジググラトが多数存在しました。作られた理由は、天まで届く大きな建物を造ることによって有名になるという説と、現世で神の住む場所を作るためという説があります。そのため、建物の内部は作られていなかったそうです。イラストのジググラトは、基礎部分や粘土板も発掘されており、当時のサイズも判明しています。

『信徒の友』2007年8月号掲載
使用画材：筆ペン、鉛筆



B.C. 1400年頃

豊穣の神様

「神様」といえば、長くて白い髭を生やしたお爺さんを想像する人が多いかも知れませんが。しかし地域や文化、歴史、宗教によって神様の姿や形、役割も様々です。約3400年前、カナンという地に、バアルというとても有名な神様がいました。



アシュトレト

豊穣、肥沃、繁殖の女神として崇められていました。バアルの妻とされています。

『信徒の友』2007年10月号掲載
使用画材：筆ペン

カウス

エドム人が崇拝した女神。約2600年前のもの。エドム人は、聖書ではイスラエル（ユダヤ人）と敵対する異民族とされていますが詳細は不明です。

『信徒の友』2007年10月号掲載
使用画材：筆ペン



バアル

約3400年前のオリエントで一番有名だったとされているのが、この“バアル”という神様です。カナン地域を中心に各所で、雨や風や雲を支配する力を有し、豊穣の神として崇められていました。また一方では、豊穣を祈る祭儀に性的な象徴が用いられたり、人身御供（生け贄）を求める偶像神であるとも言われ、悪魔の名前としても有名です。

『信徒の友』2007年10月号掲載
使用画材：筆ペン



B.C. 1100~700年頃

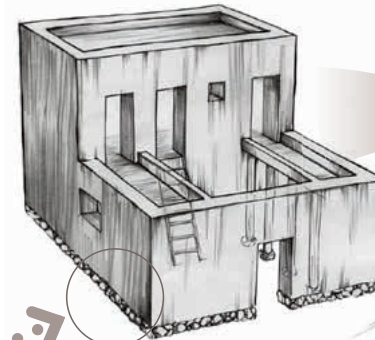
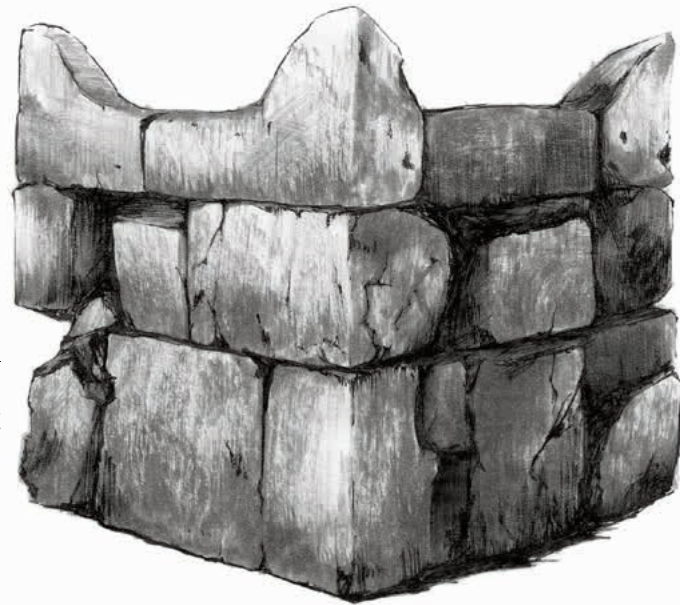
都市の発展

古代イスラエルの南端にあったベエル・シェバ (Be'er Sheva) という街の発展の様子です。何世代もの間、街の建物が潰れてはその上に建物を建て、積み重なり、何百年も掛けて大きな丘が出来上がりました。現在は世界遺産に登録されています。

祭壇

ベエル・シェバから出土した祭壇。宗教改革で取り壊された地方の祭壇を、家の土台部分に転用して使っていました。

『信徒の友』2008年3月号掲載
使用画材：筆ペン



取り壊された後も家の土台部分として再利用

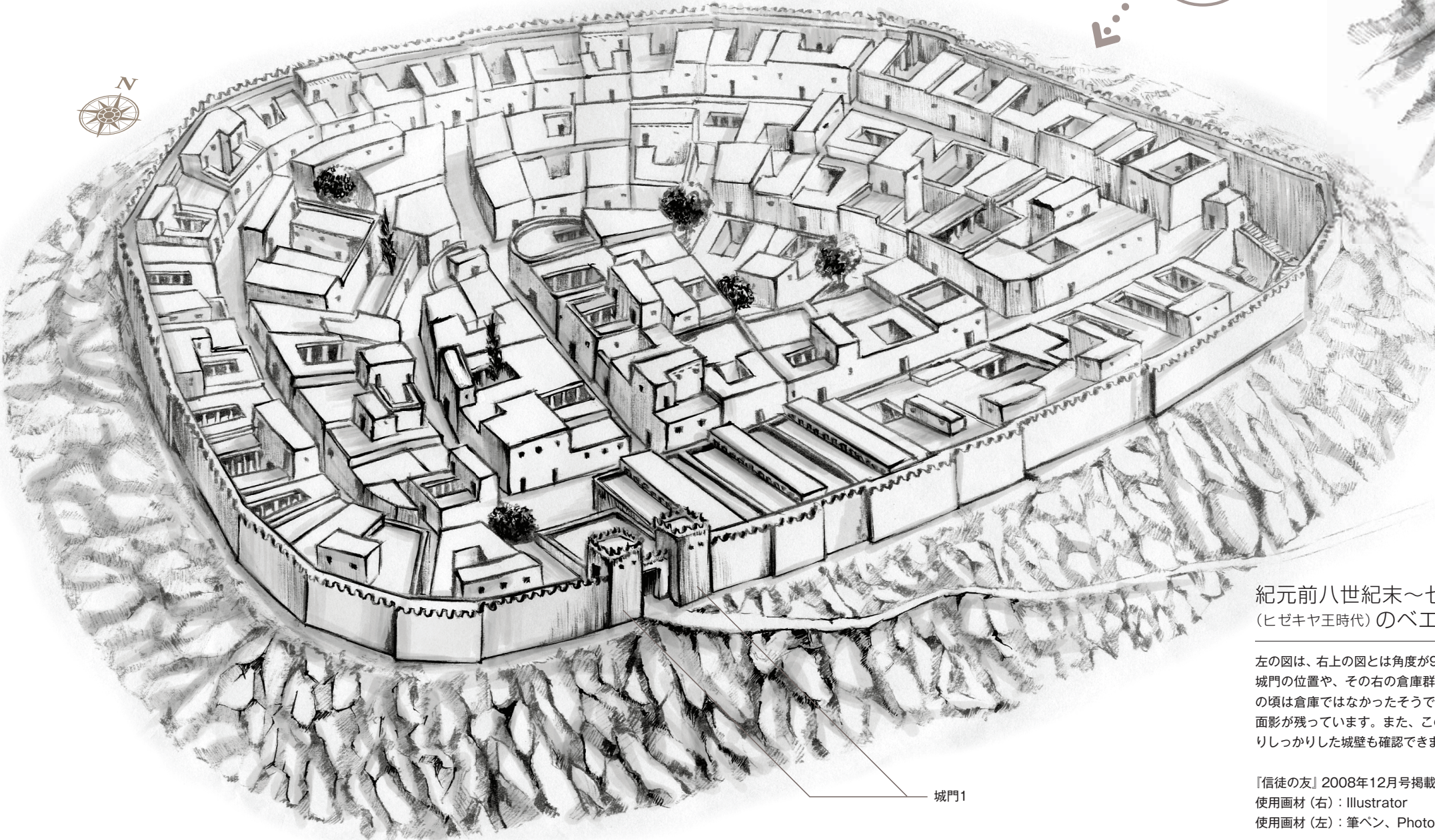
門

約400年後



紀元前十一世紀頃
(イスラエル最初期) の
居住地ベエル・シェバ

『信徒の友』2008年11月号掲載
使用画材：筆ペン、Photoshop

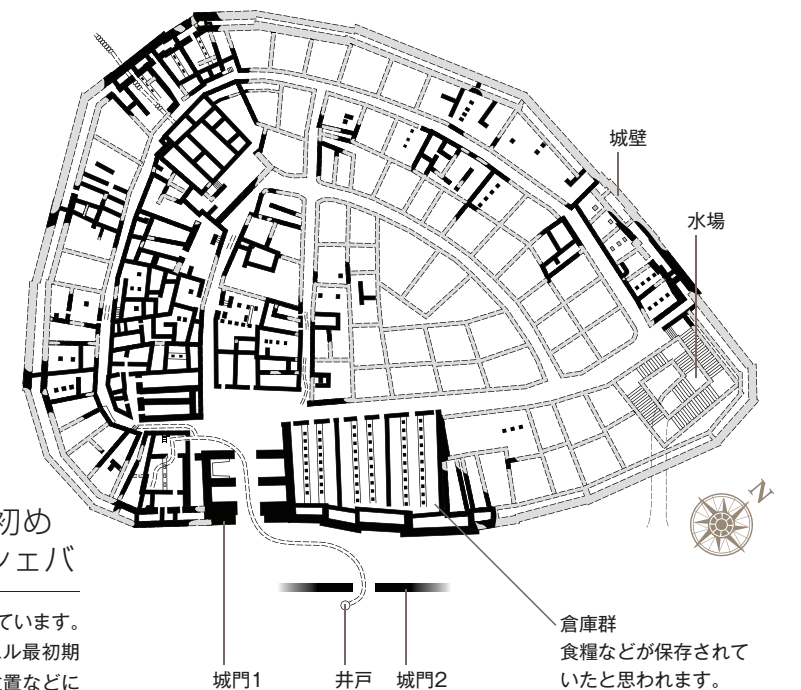


城門1

紀元前八世紀末～七世紀初め
(ヒゼキヤ王時代) のベエル・シェバ

左の図は、右上の図とは角度が90°回転しています。城門の位置や、その右の倉庫群 (イスラエル最初期の頃は倉庫ではなかったそうですが) の位置などに面影が残っています。また、この頃になると、かなりしっかりした城壁も確認できます。

『信徒の友』2008年12月号掲載
使用画材 (右) : Illustrator
使用画材 (左) : 筆ペン、Photoshop



城門1

井戸

城門2

倉庫群
食糧などが保存されていたと思われます。

城壁

水場

B.C. 1000~975年頃

ダビデとゴリアテ

この頃、イスラエルとペリシテの間で戦いが始まりました。ペリシテ軍にはゴリアテという巨人がおり、ゴリアテはイスラエル軍に一騎打ちを要求しました。それを聞いたダビデは我こそはと、サウル王に申し出て、ゴリアテとエラの谷で戦うことになりました。

ダビデ (羊飼いの少年)

羊飼いの少年。武器らしい武器を持つわけでも、防具を身につけるわけでもなくゴリアテとの決闘に臨みました。強敵と戦うにはあまりに無謀な格好です。

『信徒の友』2007年4月号掲載

使用画材：筆ペン、鉛筆、Photoshop



ダビデは投石袋から小石を取り出し、石投げ紐で石を飛ばしました。小石は巨人ゴリアテの額にのめりこみ、ゴリアテは倒れました。ダビデはゴリアテの腰に刺さっている剣でゴリアテの首を跳ね、決闘に勝利しました。その後もダビデは、つぎつぎと戦功を重ね古代イスラエル王国の王の座まで登りつめます。

石投げ紐の使い方

『信徒の友』2007年4月号掲載

使用画材：筆ペン、鉛筆、Photoshop



ゴリアテ (ガト出身の戦士)

青銅の武具に身を包んだゴリアテ。背丈は6.5アンマ(約2.9m)ほどといわれています。また、盾は自分では持たず、盾持ちに持たせていました。

『信徒の友』2007年4月号掲載

使用画材：筆ペン、鉛筆、Photoshop



盾持ち

B.C. 700~620年頃

ニネベ

聖書では、「ヨナ物語」という有名な話があります。

この頃のニネベの町は、悪の権化と言われています。ヨナは、神様から「ニネベに向かい呼びかけよ」と告げられますが、ヨナは商船に乗り、逃げ出しました。すると海が荒れ、魚に飲み込まれて連れ戻されてしまいます。しかたなくヨナはニネベへ向かい、お告げの通りに行動します。するとニネベの人々は見ず知らずのヨナの言葉を受け入れ、悔い改めました。その姿を見た神様は、ニネベを滅ぼす事をやめました。

ニネベの城壁 (想像図)

ニネベはアッシリア帝国の首都の一つです。とても大きな都市で、城壁の周りを一回りするだけで3日間も掛かったと言われています。

『信徒の友』2007年5月号掲載

使用画材：筆ペン、鉛筆

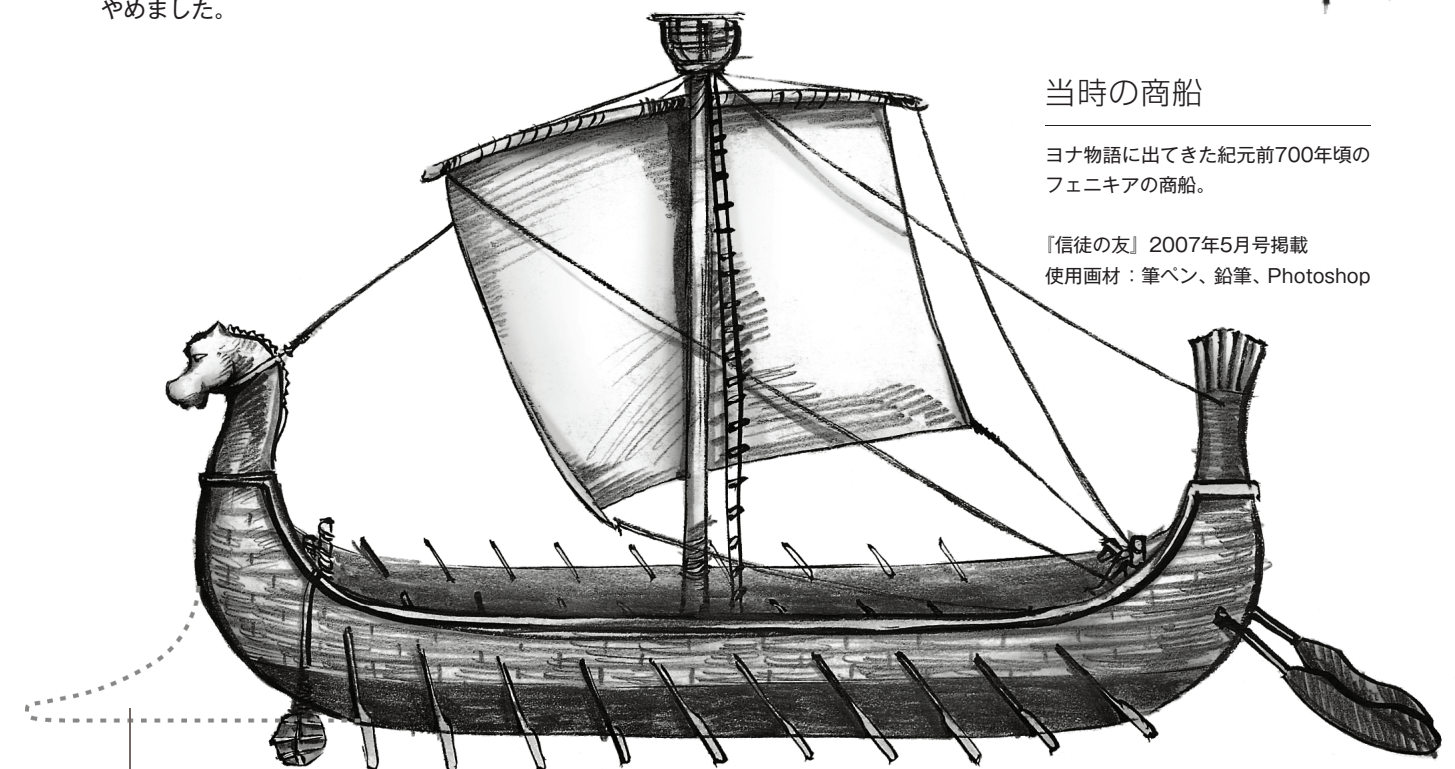


当時の商船

ヨナ物語に出てきた紀元前700年頃のフェニキアの商船。

『信徒の友』2007年5月号掲載

使用画材：筆ペン、鉛筆、Photoshop



軍艦には衝角と呼ばれる突進する為の攻撃兵器がっていました。

ニネベの遺跡にて

顔が描かれていないのは、国が滅亡したときに王の顔だけ削り取られてしまった為だそうです。

絵を描く立場としては、自分で創り上げたものや描き上げたものが勝者の都合で破壊されてしまうのは、いたたまれないです。

『信徒の友』2007年6月号掲載

使用画材：筆ペン、Photoshop



B.C. 550~20年頃

エルサレム神殿

エルサレム神殿は、紀元前10世紀にソロモン王によって建設されてから戦争で陥落するまで、1000年以上にわたり姿を変え、存在しました。

神殿は紀元70年に取り壊されていますが、現在でも外壁はほとんどの部分が残っているそうです。

エルサレム神殿 (全体)

ソロモン時代のエルサレム神殿。
神殿の建築には1万人以上の労働者が関わり、80年以上掛かったそうです。

『信徒の友』2008年5月号掲載
使用画材：筆ペン、Photoshop

エルサレム神殿 (本殿)

左ページの全体図に描かれている神殿とは形が違いますが同じ建物です。
階段の段数など、資料があるものに関しては資料を参考に描いています。

『信徒の友』2008年6月号掲載
使用画材：筆ペン、一部Photoshop

エルサレム神殿 (司祭の庭)

上のイラストの囲み部分を90°右回転させた角度から見たイラストです。

『信徒の友』2008年6月号掲載
使用画材：筆ペン、Photoshop

A.D. ??~70年頃

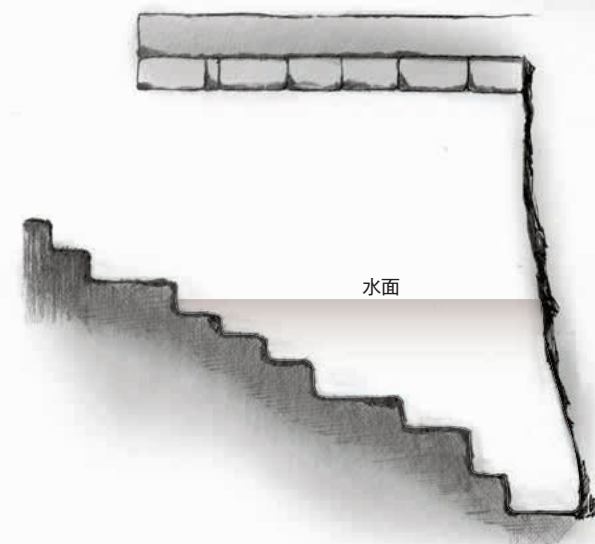
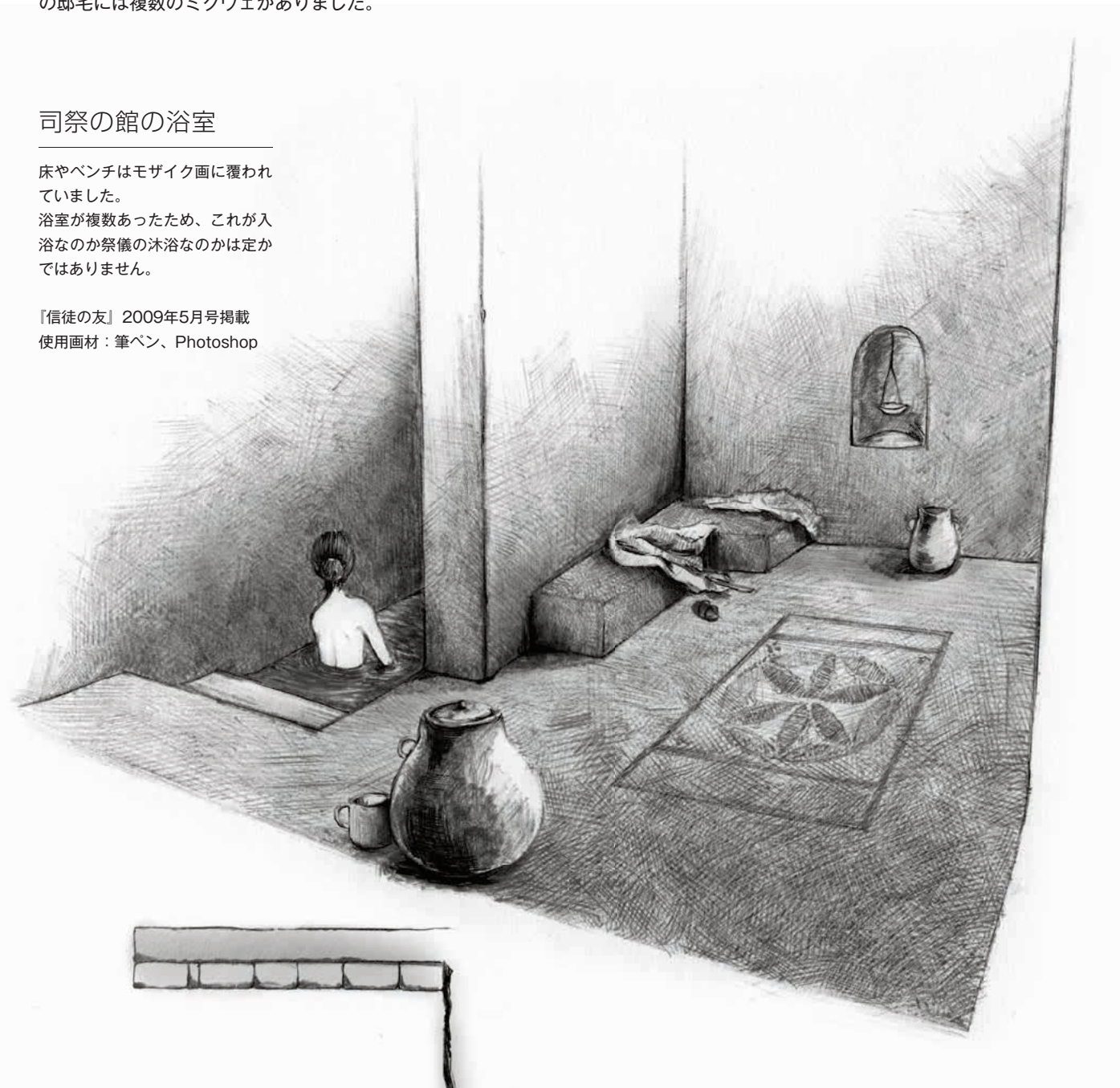
入浴と沐浴

この頃の浴槽は「ミクヴェ (Mikvah)」と呼ばれており、祭儀の沐浴や入浴など、目的によって浴槽を使い分けられていたと言われています。また、司祭はつねに水で体を清める必要があったため、司祭の邸宅には複数のミクヴェがありました。

司祭の館の浴室

床やベンチはモザイク画に覆われていました。
浴室が複数あったため、これが入浴なのか祭儀の沐浴なのかは定かではありません。

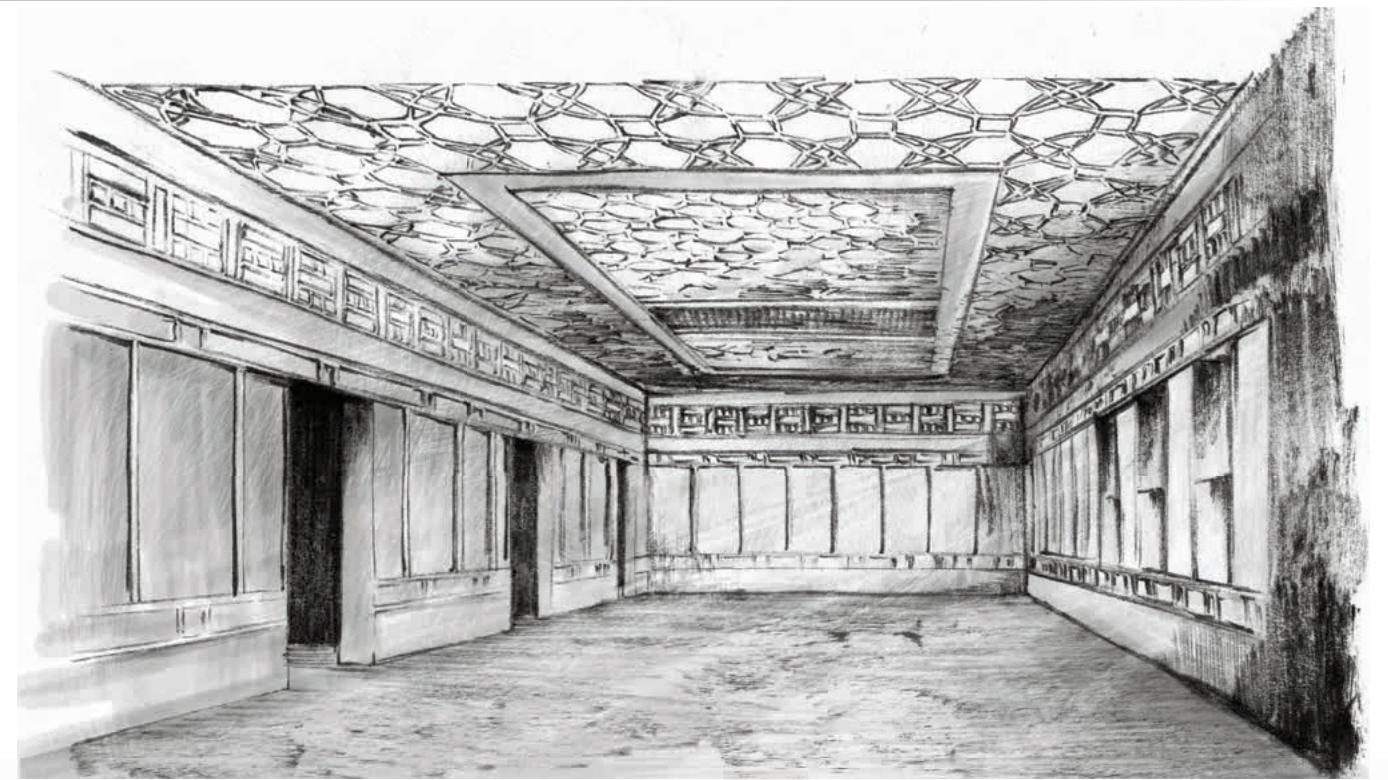
『信徒の友』2009年5月号掲載
使用画材：筆ペン、Photoshop



浴室の断面図

階段状の構造をしており、内側にモルタルを塗って水漏れを防いでいたそうです。

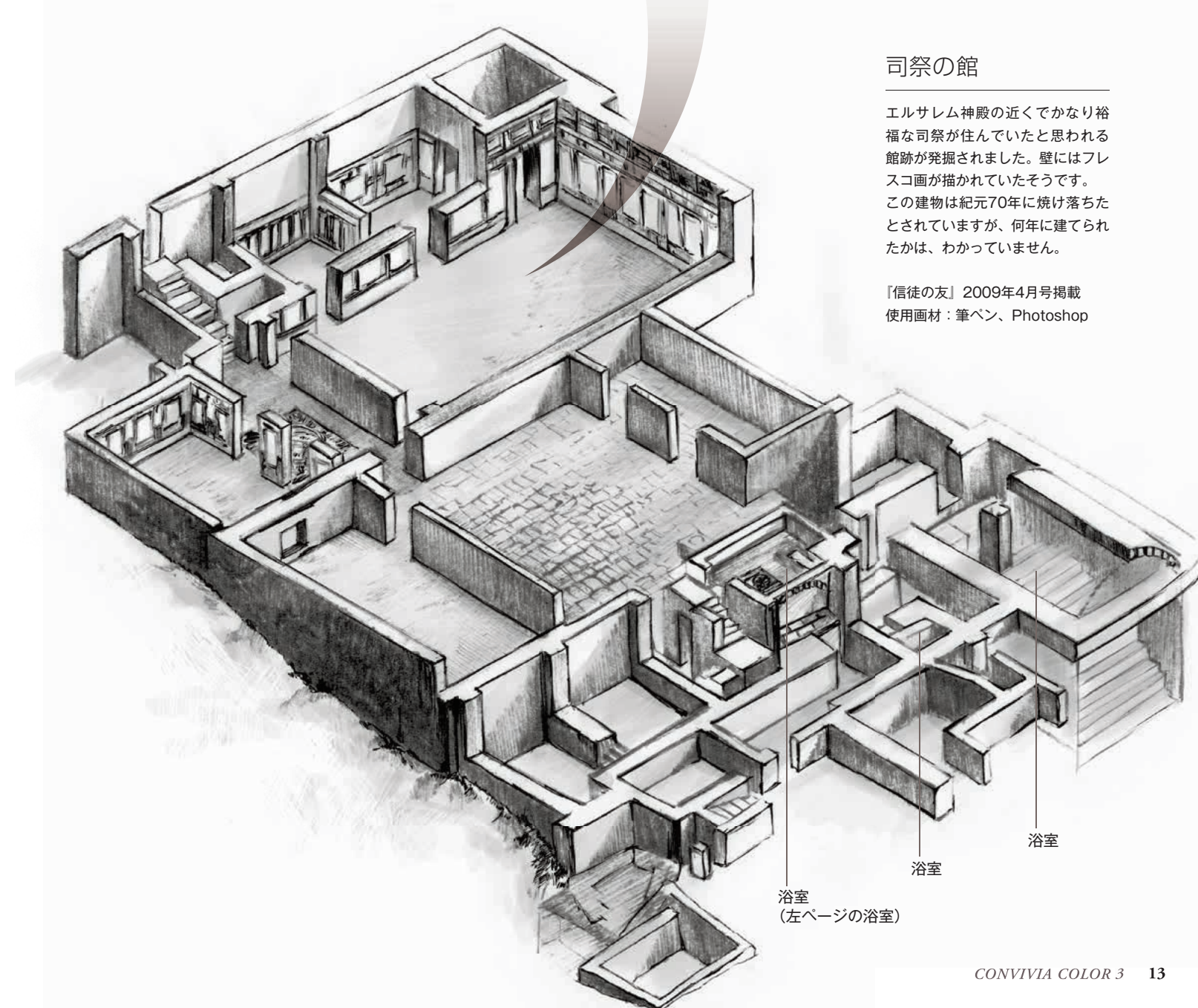
『信徒の友』2009年5月号掲載
使用画材：筆ペン、Photoshop



司祭の館

エルサレム神殿の近くでかなり裕福な司祭が住んでいたと思われる館跡が発掘されました。壁にはフレスコ画が描かれていたそうです。この建物は紀元70年に焼け落ちたとされていますが、何年に建てられたかは、わかっていません。

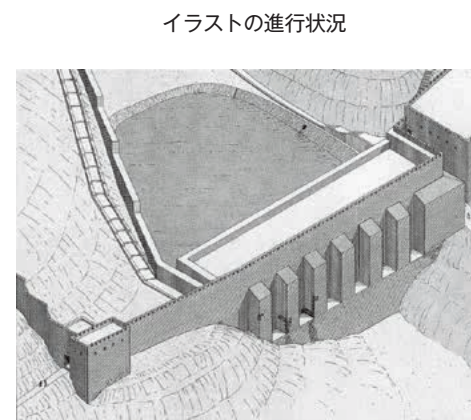
『信徒の友』2009年4月号掲載
使用画材：筆ペン、Photoshop



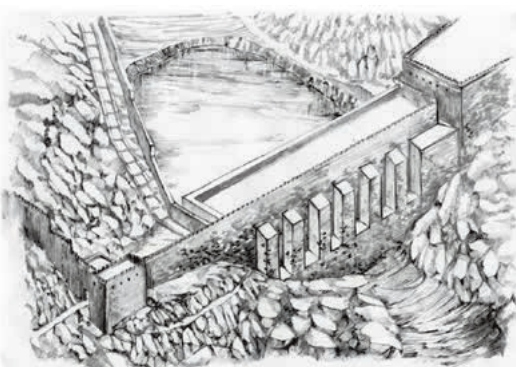
イラスト制作過程

イラストの制作過程を紹介します。
基本的に筆ペン主体で完成させていますが、イラストの内容によってはパソコン処理を施す場合もあります。その場合も、なるべく筆ペンのタッチを活かすよう心掛けています。
作例では、パソコンを多用した場合の制作過程を紹介します。

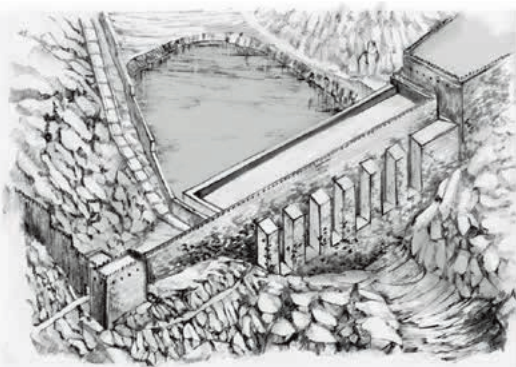
1
元の資料です。この資料を基にイラストを作成していきます。パースを整え、イラストを描くための下準備をします。



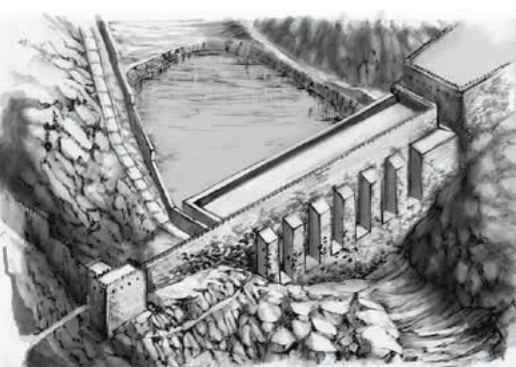
2
別紙に筆ペンで清書します。筆ペンで描ける範囲は全てこの段階で描き込みます。筆ペンで全体を描いたらパソコンに取り込み、Photoshopで作業を進めていきます。



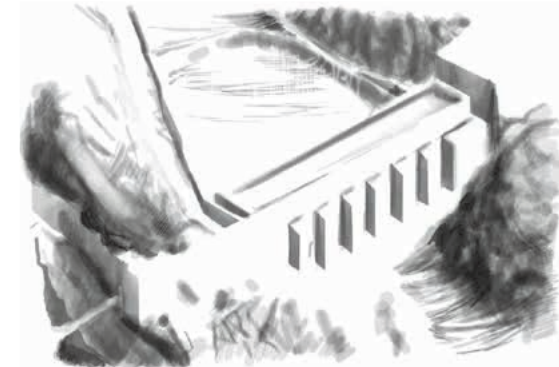
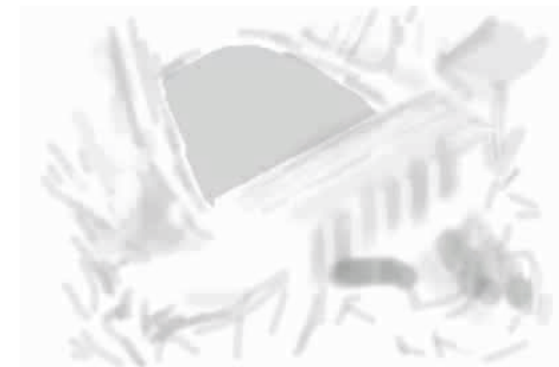
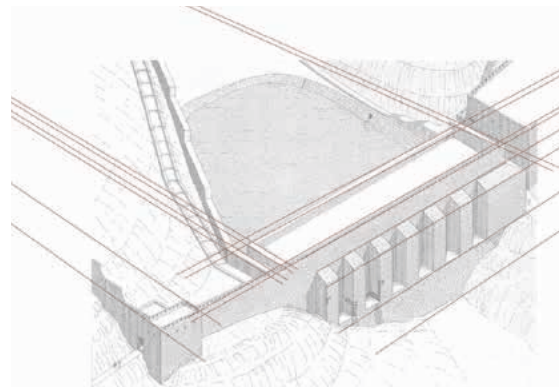
3
Photoshopで、全体の影を付けていきます。光源の位置を考え、影を塗り重ねて立体感を出していきます。



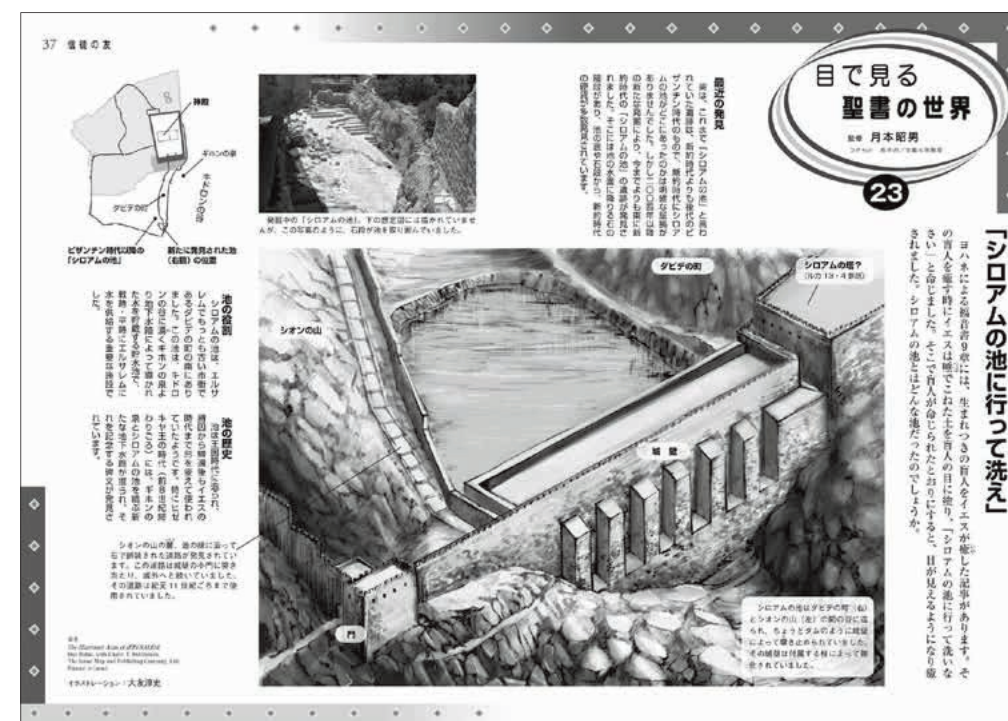
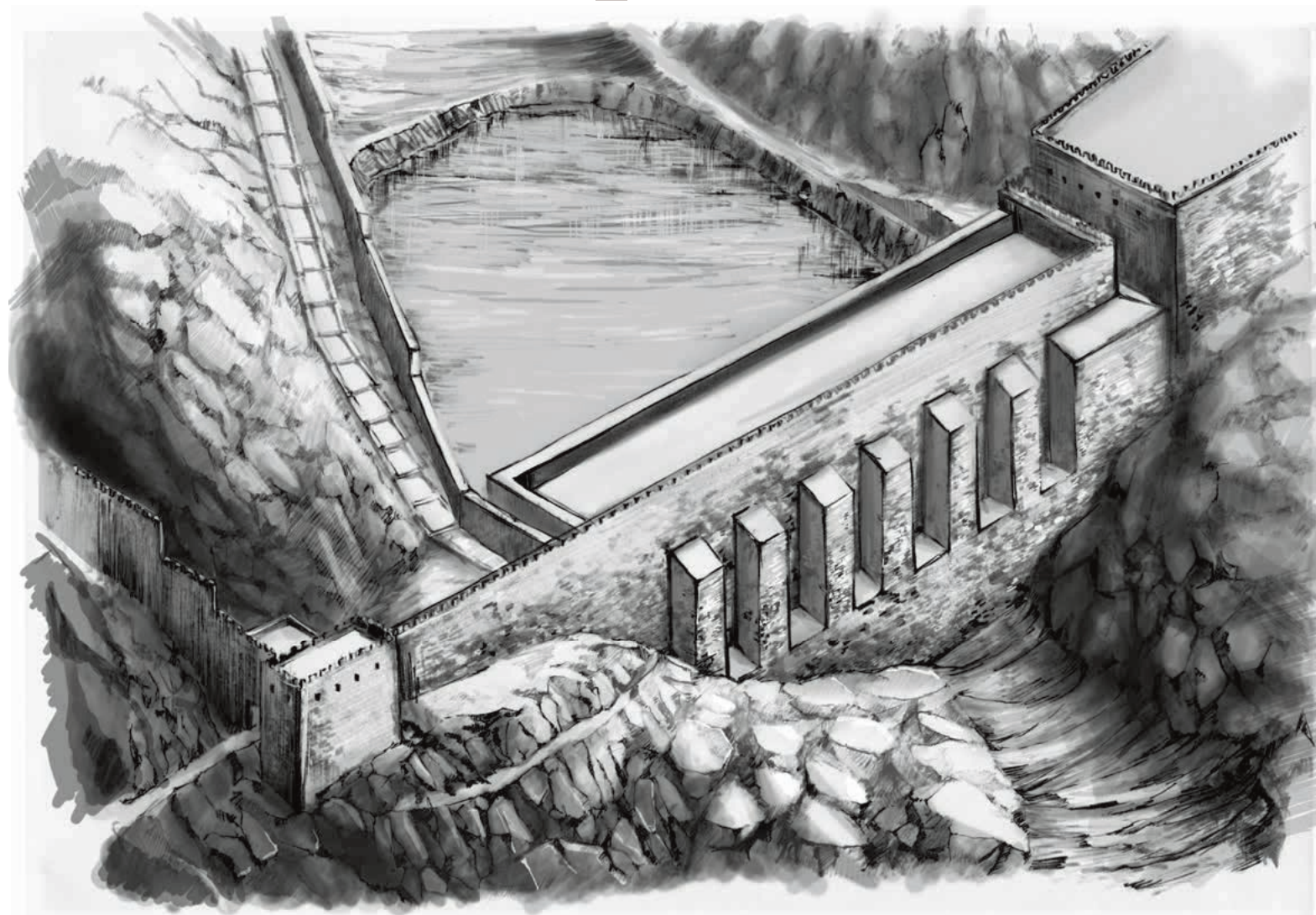
4
筆ペンで描ききれなかった細かな箇所を、タッチを崩さないようにPhotoshopで加筆していき、細部の調整をします。最終的な全体の色味や濃淡も、この段階で微調整します。



Photoshopでの加工の流れ



イラスト完成。あとは誌面にレイアウトし、図中文字を加えていきます。



シロアムの池

聖書では、イエス・キリストが生まれつきの盲人を癒した池として登場します。イエスは地面の土をつばでこねて泥をつくり、盲人の目に塗って「シロアムの池に行つて洗いなさい。」と言いました。盲人は言われた通りにすると、目が見えるようになり、そして帰って行つたと書かれています。

『信徒の友』2009年2月号掲載
使用画材：筆ペン、Photoshop



あとがき

一冊の本を編集からデザインまでを全て手掛けるというのは初めての経験でした。どんな冊子にするかを最初に決め、資料を探し、ページ割りを考えたりと、普段の仕事ではなかなか味わえない貴重な体験でした。試行錯誤しながらも、なんとか自分なりに満足できる冊子にすることが出来たと思いますが、いかがだったでしょうか。感想などいただければ幸いです。

2010 7.22 大友淳史

参考文献

- ・信徒の友 (目で見える聖書の世界*) '07年4月～'09年9月号 (月本昭男 監修) / 日本キリスト教団出版局
- ・目で見える聖書の時代 (月本昭男 監修) / 日本キリスト教団出版局
- ・Varda Sussman, *Oil-Lamps in the Holy Land: Saucer Lamps*, Archaeopress, Publishers of British Archaeological Reports, Gordon House (P3, 8)
- ・*The Complete Guide to the TEMPLE MOUNT EXCAVATIONS*, Eilat Mazar, Shoham Academic Research and Publication, 2002 (P10-11)
- ・Alfred Edersheim, *DER TEMPEL: Mittelpunkt des geistlichen Lebens zur Zeit Jesu*, Angus Hudson Ltd. / Three's Company, 1997. (P10-11)
- ・Yitzhak Magen, *THE STONE VESSEL INDUSTRY IN THE SECOND TEMPLE PERIOD*, Israel Exploration Society, Israel Antiquities Authority, Jerusalem, 2002. (P2)
- ・ZE'EV HERZOG, *BEER-SHEBA II The Early Iron Age Settlements*, Publishing & Distribution by, RAMOT PUBLISHING CO, Tel Aviv University. (P6-7)
- ・Volkmar Fritz, *Die Stadt im alten Israel*, —Beck's Archäologische Bibliothek, Verlag C. H. Beck, München 1990. (P6-7)
- ・*The Illustrated Atlas of JERUSALEM*, Dan Bahat, with Chaim T. Rubinstein, The Israel Map and Publishing Company, Ltd. Printed in Israel. (P11-12)

*「目で見える聖書物語」は、2008年度から「目で見える聖書の世界」にタイトルが変更されました。

CONVIVIA COLOR—3

イラストで見る 古代オリエント

編集／デザイン／イラストレーション：大友淳史

発行 株式会社デザインコンビビア

〒162-0064 東京都新宿区市谷仲之町3-22 ワールドビル1F

Tel. 03-3358-1455 Fax. 03-3358-1675

E-mail (代表) mail@convivia.co.jp

Web <http://www.convivia.co.jp/>

Blog <http://convivia.blog.shinobi.jp/>